

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月5日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770014

研究課題名（和文）非デカルト的実体二元論への 人 の現象学からのアプローチ

研究課題名（英文）Non-Cartesian Substance Dualism: An Approach from Phenomenology of Person

研究代表者

植村 玄輝 (Uemura, Genki)

岡山大学・社会文化科学研究科・講師

研究者番号：40727864

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代哲学における非デカルト的実体二元論の基礎について、現象学の立場からの貢献を目的としたものである。より具体的には、私たちの知覚的経験と意志的経験・行為の経験の現象学的分析に着目することで、「私たちは私たちの身体とはなんらかの意味で異なる 人 である」という非デカルト的実体二元論の中心的主張をより明確化するための予備作業を行なった。

本研究の成果は（1）20世紀初頭に活躍した古典的な現象学者たちが私たちの知覚的経験や意志的経験・行為の経験に関して残した分析をいまなお参照に値するものとして再構成し、（2）それを現代の研究にどのように生かすのかについて概略を示した点に集約される。

研究成果の概要（英文）：This project aims at contributing to the so-called non-Cartesian Substance Dualism in contemporary philosophy from phenomenological perspectives. Drawing on phenomenological analysis of our perceptual, voluntary, and action-related experiences, the project has achieved preliminary works, which help us with clarifying the central claim of the non-Cartesian Substance Dualism: We are persons that are in some way not distinct of our bodies.

The outcomes of the project could be summarized as follows. (1) I have reconstructed analyses of our perceptual, voluntary, and action-related experiences provided by classical phenomenologist and shown how they are still relevant and worthy of consideration. (2) I have outlined how we can make use of the analyzes of the classical phenomenologists in the contemporary debate.

研究分野：哲学

キーワード：現象学 心の哲学 形而上学 知覚 意志 行為 フッサール ミュンヘン・ゲッチンゲン学派

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代の心の哲学の新たな展開を背景としている。現代の心の哲学において物理主義的な立場は強い影響力を持ち続けているが、この立場が直面する原理的な困難を踏まえ、人 (person) ないし自己 (self) としてのわれわれを、独自の実体とみなす立場が再び提唱され、注目を集めている。この立場は、人としてのわれわれが物理的な世界の一員であることを否定しないため、心を非物質的な実体とみなしたデカルトの二元論から区別され、それゆえ「非デカルトの実体二元論」と呼ばれる。この立場をより説得的なものとするためには、人であるとはそもそもどういうことかについての現象学的分析が欠かせない。だが、人の形而上学的な身分、とりわけ、それが含意する反自然主義的・反物理主義的な見解をどのように評価するのかという点を中心的な論点とする現代の議論状況において、そうした研究はいまだ手薄であると言わざるを得ない。

### 2. 研究の目的

こうした事情に鑑みて、本研究は初期現象学における「人であるとはどういうことか」に関する議論を、現代の非デカルトの実体二元論との接続可能性に注意を払いながら再構成することを目指した。より具体的には、知覚経験と意志・行為の経験に話題を限定し、それらの経験の現象学的分析によって示唆される人のあり方はいかなるものかを明らかに出すことが本研究の目的であった。こうした研究によって、人の形而上学に対して現象学がどのような制約・要請を与えるかを明らかにすることができれば、本研究の目的は達成されたことになる。

### 3. 研究の方法

本研究では、知覚経験と意志・行為の経験のそれぞれについて(1)初期現象学の一次資料の精査とそれに基づく議論の再構成と(2)現代の議論との接続可能性に関する検討を行うというかたちで研究を進めた。(1)に関しては、刊行済みの資料調査に加え、ルーヴァン(ベルギー王国)のフッサール文庫におけるフッサールの未刊行トランスクリプトの調査なども行った。

### 4. 研究成果

本研究の最大の成果は、初期現象学が残した知覚経験と意志・行為の経験に関する現象学的分析は、本研究が当初見積もっていたよりも大きな規模で現代の議論と接続できるし、またそうすべきであるということを確認した点にある。具体的には、以下の通りである(これらは、下記にあげた論文の中でも部分的に論じられている)。

- (1) 知覚経験と感覚の役割に関するインガルデンの議論は、現代の知覚の哲

学のなかでも検討に値する立場の可能性を示唆している。

- (2) (初期から中期までの)フッサールが支持した知覚経験の二要素説(知覚経験を感覚と非感覚的な志向性の二つの要素からなるとみなす立場)は、知覚の哲学における選択肢として検討するに値する立場である。
- (3) 知覚経験の二要素説をフッサールから引き継いだインガルデンの知覚論は、知覚経験における非感覚的な志向性のあり方を、純粹志向的対象とその性質の投影という道具立てによってさらに説明している。このことはインガルデンの立場を複雑にしているが、それは十分な根拠に基づいており、純粹志向的対象に関するインガルデンの理論が知覚経験の現象学的分析を大きく超える射程を備えているという事実を鑑みれば、用語可能である。
- (4) 動機づけに関するプフェンダーの議論は、同様の主題に関する初期現象学の議論の出発点とみなすことができ、そうした文脈に位置づけ直すことで、初期現象学における動機づけ論は、行為の理由に関する現代の議論に現代とは異なる角度から切り込んだものとして理解することができる。
- (5) 行為と意志に関するプフェンダーの現象学的な議論は、感情に関するプフェンダー自身の議論と関連づけることによって、より十全に解釈・評価できる。
- (6) プフェンダーによって導入され、初期の現象学者たちによって共有された、自我(das Ich)の層構造という発想は、経験の現象学的分析に基づいた人の形而上学の基礎作業として再解釈することが可能である。

本研究の範囲内では、これらの成果のなかを示された新たな議論の可能性が十分に示されたわけではない。しかし、これらの論点を一次資料の精査という手法に基づいて提出したことは、初期現象学および初期現象学の現代哲学の接点に関わる研究にとって大きな意義があったと考えている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 植村玄輝, 「世界無化の考察によってフッサールは何をどこまで示したのか」, 『フッサール研究』第15号, 2018年, 1-23頁。(査読なし)
2. 植村玄輝, 「哲学史研究は哲学的かつ歴

- 史的でありえるのか—過去の主張についての規範的探求という観点からの提案」、『*哲学*』(日本哲学会), 第 68 号, 2017 年, 28–44 頁。(査読なし)
3. 植村玄輝, 「現象学的実在論と感覚の関係説」、『*現象学年報*』, 日本現象学会, 第 31 号, 2015 年, 99–107 頁。(査読あり)
  4. 植村玄輝, 「フッサールと 哲学者たちの楽園」—佐藤駿『フッサールの超越論的現象学と世界経験の哲学』第四章に寄せて』、『*モラリア*』第 22 号, 東北大学倫理学研究会, 2015 年, 80–100 頁。(査読なし)
  5. 植村玄輝, 「行為と行為すること—フッサールとともに現象学を拡張する可能性について」、『*情況*』第四期 2015 年 8 月号, 127–139 頁。(査読なし)
  6. 植村玄輝, 「超越論的現象学の自然化?」、『*モラリア*』第 20・21 合併号, 東北大学倫理学研究会, 2014 年, 189–210 頁。(査読なし)
  7. Alessandro Salice & Genki Uemura, “Naturalizzare la fenomenologia – senza naturalismo.” *Philosophy Kitchen. Rivista di filosofia contemporanea* 1, 2014, pp. 212–222. (査読なし)

【以下は原稿提出済みの論文】

- Genki Uemura, “Demystifying Roman Ingarden's Purely Intentional Objects of Perception.” Forthcoming in *New Phenomenological Studies in Japan*, Shigeru Taguchi & Nicolas de Warren (eds.), Springer.
- Genki Uemura & Alessandro Salice, “Motives in Experience. Pfänder, Geiger, and Stein.” Forthcoming in *Phenomenology of Experience*, Antonio Cimino & Cees Leijenhorst (eds.), Brill.
- Alessandro Salice & Genki Uemura, “Social Acts and Communities. Walther between Reinach and Husserl.” Forthcoming in *Gerda Walther. Phenomenology of Sociality, Psychology and Religion*, Antonio Calcagno (ed.), Springer.
- Genki Uemura & Toru Yaegashi, “Alexander Pfänder.” Forthcoming in *Routledge Handbook of Phenomenology of Emotions*. Thomas Szanto & Hilge Landweer (eds.), Routledge.
- Genki Uemura, “Alexander Pfänder.” Forthcoming in *Routledge Handbook of Phenomenology of Agency*, Christopher Erhard & Tobias Keiling (eds.), Routledge.

〔学会発表〕(計 15 件)

1. Genki Uemura, “What Does it Mean that Social Acts are Addressed to Others?”

- Reinach Centennial Conference, Ludwig-Maximilians- Universität München, December 14, 2017.
2. 植村玄輝, 「現象学的態度と美的体験—フッサールと美学の接点?」, 立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト「分析哲学と芸術」研究会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017 年 11 月 19 日。
  3. 植村玄輝, 「初期現象学と共同行為論の接点—期待していいこと、しないほうがいいこと、泥臭い作業を厭わない人のための今後の課題」, シンポジウム「共同行為の現象学—現象学と現代行為論の接点を探る—」における提題, 日本現象学会第 39 回研究大会, 大阪大学吹田キャンパス, 2017 年 11 月 11 日。
  4. 植村玄輝, 「現象的なものとリアルなもの—初期現象学とメルロ＝ポンティ」, シンポジウム「メルロ＝ポンティと初期現象学」, メルロ＝ポンティ・サークル, 成城大学, 2017 年 9 月 3 日。
  5. 植村玄輝, 「哲学史研究は哲学的かつ歴史的でありえるのか—過去の主張についての規範的探求という観点からの提案」, シンポジウム「哲学史研究の哲学的意義とはなにか」, 日本哲学会第 76 回大会, 一橋大学国立東キャンパス, 2017 年 5 月 20 日。
  6. Genki Uemura, “On the Intentional Structure of (Hetero-Induced) Shame/Pride.” Hiroshima Philosophy Forum 1: Mind & Cognition, Satellite Campus Hiroshima, April 29, 2017.
  7. Genki Uemura, “On the Intentional Structure of (Hetero-Induced) Shame/Pride.” Social Self-Conscious Emotion, the Second Cork Annual Workshop on Social Agency (CAWSA II), University College Cork, March 15, 2017.
  8. Genki Uemura, “What is it Like to be Motivated? An Answer from Alexander Pfänder.” The 7th PEACE Conference, University of Tokyo (Komaba Campus), December 18, 2016.
  9. Genki Uemura, “Motivating Dual Factor Theories of Perceptual Experience.” Consciousness and the World, Tongji University, Shanghai, June 4, 2016.
  10. Genki Uemura, “Motivation and Phenomenal Causation. Assessing Edith Stein's Beiträge.” Intentionality and Normativity Workshop, Newman House, University College Dublin, February 19, 2016.
  11. Genki Uemura, “Handlungswille and Intention in Action. Yet Another Convergence between Husserl and Searle?” University College Cork, February 17, 2016.

12. Genki Uemura, "What is it Like to be Motivated? An Answer from Alexander Pfänder." *Phänomenologie in Aktion/Phenomenology in Action*, Ludwig-Maximilians-Universität München, February 10, 2016.
13. Genki Uemura "(A Husserlian Version of) the Double Factor Theory of Perceptual Experience." The 13th Annual Meeting of the Nordic Society for Phenomenology, Södertörn University, Stockholm, April 23, 2015.
14. 植村玄輝, 「フッサールと 哲学者たちの楽園」—佐藤駿『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』に寄せて, 東北大学川内キャンパス, 2015年2月21日。
15. Genki Uemura, "Modest and Bold Ontologies for Gallagher/Zahavi's 'Naturalized' Phenomenology." Japan-China Philosophy Forum, Beijing Foreign Studies University, September 21, 2014.
16. Genki Uemura, "Phenomenology in the Light of Phenomenology. A Case Study in Husserl's Hylomorphic Account of Perceptual Experience." Kairos and Topos: Phenomenology and the Celebration of Thinking, the 6th International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East-Asian Circle) cum the 8th SPA (Symposia Phaenomenologica Asiatica), the Chinese University of Hong Kong, May 23, 2014.

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者  
なし

〔図書〕(計2件)

1. 植村玄輝, 『真理・存在・意識—フッサール『論理学研究』を読む』, vi+312頁, 知泉書館, 2017年
2. 植村玄輝・八重樫徹・吉川孝 編著, 富山豊・森功次 著 『ワードマップ現代現象学—経験からはじめる哲学入門』, viii+314頁, 新曜社, 2017年

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

植村玄輝 (UEMURA, Genki)

岡山大学大学院社会文化科学研究科・講師

研究者番号: 40727864

(2)研究分担者

なし